慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「唐糸草子」解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.27 (1998. 3) ,p.70- 81
JaLC DOI	10.14991/002.19980300-0070
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980300-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔唐糸草子〕解題・翻刻

石川　透

解題

『唐糸草子』は、御伽文庫二十三編の一つとして、有名な作品である。御伽文庫本に先立つ古活字版二種と整版二種が知られているが、意外と写本は少ない。ここに紹介する『唐糸草子』は、江戸初期の写しと思われ、写本としては、現存最古の部類に属すものである。

本書を他本と較べると、独自の異文が目立つ。単純な誤写や脱文と思われるものもあるが、鎌倉から信濃へ向かうことを「のほる」と表現したり、他本にはない表現がみられるなど、明らかに本文を変えようとしている点も多い。また、「から糸の舞」のように、「前」とあるべきところを「舞」と表記することなどは、幸若舞曲『伏見常葉』等にも見られ、江戸初期の特徴を示すものかもしれない。

細かい違いは多いものの、披見しえた諸本の中で、本文的に最も近いのは、〔寛永〕刊絵入大本（丹緑本であることが多い）のようだ。系統的には、〔慶長元和〕刊古活字版十行絵入大本や御伽文庫本も同じであるが、漢字や仮名の使い方が最も近いのが、〔寛永〕刊絵入大本なのである。しかも、本書と異なる所を検討すると、〔寛永〕刊絵入大本の方がすぐれていることが多い。ということは、問題は残るものの、本書は〔寛永〕刊絵入大本をもとにしたものと想像できる。

室町物語においては、印刷本を写す際には、かなり忠実に写すことが多いのだが、本書の場合は、かなり独自に本文を変えながら写したようだ。信じられるかは別にして筆写名も伝わっており、江戸初期における本の写し方、異本の発生の仕方を考える一例となろう。

なお、末尾に記される「佐草清三郎利清筆」と「茂清蔵書」の文字は同筆で、本文とは別筆にみえる。「利清」と「茂清」は、名前からすると近親関係のようだ。どのような人物なのかはわからないが、『弘文荘待賈古書目』第二十号（一九五一年六月）をみると、一三二番「落窪物語」に、「寛文頃古写本／佐草直清手写／（中略）第四冊の末に同筆にて「佐草蔵書」として「直清之印」とせる大形朱印あり。」との記述がある。また、『国書総目録』著者別索引には、「佐草自清　神道雑事雑筆」というのがある。いづれも生存した時代ははっきりしないが、

一族に当たるのかもしれない。

本書の書誌は、以下の通り。

所蔵、架蔵
形態、袋綴、一冊
時代、［江戸初期］写
寸法、縦二六・六糎、横一八・〇糎
表紙、打曇り表紙
外題、ナシ
内題、ナシ
料紙、斐楮交漉紙
行数、半葉七行
字高、二〇・五糎
丁数、四五丁
奥書、「佐草清三郎利清筆／茂清蔵書」
印記、末尾に「茂清之印」の朱印

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。また、墨書による不読箇所はおよその字数を□で示し、補入箇所は（　）括弧に入れて示した。

［唐糸草子］

しゆ永八年なつの比、かまくら、ひやうへのすけよりともは、はつか国のさふらひたちを、皆、かまくらへめしのほせ、ちうもんに出させ給ひて、さふらひたちにおほせけるは、「いかにかた〳〵、聞給へ。そも〳〵、平家は、よりともかいせひにおそれて、都をそおちて候へ。きそのさまのかみよしなか、十郎くわんしやゆきいゑ、わかかうみやうかほにて、くわんはくにやならん、ほうわうにはならんと、天下をほしひまゝにふるまふ事こそ、きつくわいなれ。平家たいちの其さきに、よしなかをたいちせんと、さたけのくわんしや、うけたまはり、見申、みちのくのひてひらも、九郎くわんしやよしつねをのほせんと申也。此月の中比なるへし。せいをのこさすつれ給ふへし。したくせよ」とそおほせけり。みな〳〵国へくたりけり。

おりふし、其比、かまくら殿に、から糸のまひとて、御所かたの女はうあり。是は、しなのゝ国、きそとのゝさふらひ、てつかの太郎かなさしみつもりかむすめ、ひわのしやうす也。殊すくれてあれはとて、十八のとし、かまくらへめしのほせ、くわんけんのさしきをあつけられる。

から糸、此よしをうけたまはり、情なの事や、きそ殿のめつほうは、おやめつほうなり。いかにもして、此事をきそ殿にしらせたてまつらんとて、ひとま所へ忍ひ、ふみこま〳〵と書、けにんの男にもたせ、都へのほせらるる。

けにん、かまくらを出て、十三日と申には、都について、ちゝのてつかをそふしやにて、かの文を、きそ殿へこそたてまつれ。

よしなか、ひらき御らんして、是は、いか成風のたよりとおほしめし、よみ給ふに、「かまくら中の体は、きそ殿御大事の御ひやうたん、おくりやうこくと、くはんとうのせいかひとつに成、この月のなかは、都のほりとなり。此たひのよろひには、ちゝのてつかに、ゑちこしなの下されよ。これにて、から糸か、いかやうにもして、よりともの御いのちを、一つわきさし、あてかい奉り候はん。きそ殿へ、ちうたいに、ちやくいと申わきさしそへて給れ」とこそかいたりけれ。

よしなか、御らんして、なのめならすにおほしめし、やかて、返事あそはしける。「そも〳〵、から糸、ちうこん、山ほとおほしめす。此たひの悦には、ちゝのてつかに、ゑちこしなのとらする。からいと、それにてより、よりともの命をとるならは、くわんとう八ケ国を、ちゝのてつかにとらせ、あめかしたのふくしやうくんになさうす也。から糸をは、よしなかみたい所になすへし。もし又、露のいのちうしなひなは、ひやくおんにおもふへし。此事、人にしらすなよ」と書とゝめ、きそ殿につたわる、ちうたひのちやくいと申わきさしそへて、下されける。けにん、これをたまはり、かまくらへくたり、しゝう、女はうにみせけれは、からいと、なのめに悦て、かのわきさしをもつて、よりとものすいめんのたひを、ねらひけるこそおそろしけれ。

さすか、よりともは、くわほういみしきたいしやうにてましませは、とかくのかれ給ふそめてたき。おりふし、其比、大御所さま、みたいさまの、くすりの御風呂候に、かのからいと、御とも申てまいられけり。その日のふろの奉行に、つちやの三郎もとすけなるか、から糸の舞の小袖のしたより、わきさしを見つけつゝ、「此きぬのぬしはたれそ」と尋けり。ともの女はう、承りて、「からいとさまの御小袖なり」と申ける。

もとすけ、おほきにおとろき、あのから糸と申は、きそとのゝ御うち、てつかの太郎かむすめ也。いかさま、是は、わか君さまの御いのちをねらひ申女なり。君にこの事をしらせまいらせんとて、御所をさしてそまいりける。

よりとも、御らんして、「もとすけは、風呂のふきやう申さぬそ」。もとすけ、うけたまはり、「つちや、ふろの奉行に、たからを見つけて候。御らんせよ」とて奉る。よりとも、御らんして、「さて、ふしきの事ともや。これは、きそにつたわりつるちうたいに、ちやくいと申わきさし也。何とて、もとすけは見つけたるそや」との給へは、「御所かたの女はう、から糸の舞の、小袖の下より見つけ申て候。そも、からいとゝ申は、きそとのゝみうちなる、てつかの太郎かむすめなり。いかさま、これは、若君さまの御いのちを、ねらひたてまつる也。御身ちかくめしつかはるゝ事、なか〳〵、君さまの御ふかくなり」とそ申ける。

よりとも、きこしめし、おほきにをとろき、「からいとめせ」とそおほせけり。「うけたまはり候」とて、御まへゝめし出さるゝ。から糸、御まへにかしこまる。よりとも、御らんして、「何とて、なんしは、きそとのゝちうたい、ちやくいと申わきさしはもちたるらん」と、とい給へは、「これは、きそとのにつかはれ申せし時、かた見とて、たまはりて候」とそ申ける。

よりとも、きこしめし、女のかた見に、ちうたいはにあぬなり、御きつかひにおほしめす。「まつ〳〵、世のしつまる程、

まつ岡とのへ、あつけをきたてまつれ。つちや」とそおほせけり。つちや、うけたまはり、からいとをひきくして、まつかをかとのへあつけ奉る。

そのゝち、つちやは、からいとのまひのつほねにて、きそとのゝ文を見つけ出し、よりともへ奉る。ひやうへのすけとの、御らんして、天のあたふるたからなりとて、八まんの御ほうてんに、おさめをかるゝ也。

そのゝち、とにかくに、もとすけは、しゆじんなりとて、むさしの国に、いなけのしやう、一まんしやうの所を、つちやにこそくたされけれ。

そのゝち、「からいとめせ」とそおほせける。つちや、うけたまはり、まつか岡殿、きこしめし、「そも〳〵、よりともは、日本のぬしとならうすものか、礼儀、はつとをしらぬ。日本のぬしにはなりかたし。いかに、もとすけ、物をきけ。仏はあく人をたすけんため、じやうとをたて給ふ。其ことく、此かいていも、あく人たすけんためのしゆつけは、ふつしやをたつる也。たとへ、しうにむかつてゆみをひき、おやにむかつて太刀をぬき、きうはのくひをきりたるとも、さんりんしたるあく人に、しさいはあらしとおもふなり。さやうなとかをせん人は、さいけにあつけをかすして、みつからにあつけをき、とかをせむへきに、かへせとは、もとすけかふとゝきか、よりとものふとゝき、申におよはす。みつからは、しゆつと申、をんなといひ、よりともにもとめて、はしをかゝするか、したをくわん」と御はらたち、ちからおよはす、もとすけは、御所さまへまいり、此よしをそ申されける。

よりとも、きこしめし、「そのきならは、まつかをかとの、御はらのなくるまて、あつけをき奉れ」とて、かさねてしさいはましまさす。

其後、まつか岡とのは、「とかくに、からいとは、大事のものにて候へは、かまくら中にかなふまし。いそき、しなのへのほれ」とて、ちやうひつのものをそへ、よる〳〵しなのへ、忍ひてをくられける。

むさしの国、ろくしよと申ところにて、かちはら平蔵かけときは、かうつけのくに、ぬまたのしやう、百日のひをふつて、かまくらへのほるとて、から糸に、はなつめにあたふる事こそほいなけれ。

かけときは、みるよりも、「わか君さまの、御いのち、ねらひたてまつりしくせものなり。それ〳〵」とけちすれは、ちやうにちのものとも、東西へ、はつとちりにけり。その時、かけとき、から糸ををしこめて、かまくらへのほりけるこそかなしけれ。うらめしきかちはらかな、わかいゑにかへらす、御所へひかせてまいり、「かちはらか、かうつけみやけたてまつらん」とて、まいらせけり。

よりとも、御らんして、「これは、何たるはなにもましたるみやけ」とて、おほきによろこひ、「いかさま、是は、たゝ、から糸ひとりのむほんにてはよもあらし。かまくら中にて、大みやう小みやうの、むほんの人しゆ有へし。たつのさきにて、七十五度、とひちやうして、とへ」とて、五人のふしへそわたされける。

まつかをかとの、きこしめし、かちはらとしなんとて、かま

くらへおこしたつ。よりとも、きこしめし、「まつ〳〵こなたへひけや」とて、御しよさまのうらなる、いしのろうにこめらるゝ。から糸のふのわろき、若君さまのくわほうにをよはす。

そのゝち、からいとは、しなのゝ国に、八そしにあまるらうおうをもちたるなり。十二になるむすめをもたぬ也。からいと十八歳のとし、かまくらへ下りしか、今年は、はや十二になるとおほえたりしか、名をはまんしゆと申。からいとのろうしやのよし、しなのゝ国へ、風のたよりにきこへけれは、うはをはしめ、「そも、これは何事そや」、てんにあふきちにふし、りうていこかれなきける。

まんしゆ、涙をおさへて申けるは、「わか身ひとりならは、とひもこへ、はゝの行ゑをきかまほしく」と候へは、にかう、きこしめし、「みつからなけき候も、なんちにおとらぬそよ。今よりのちにあふ事もありもせん」となかれけり。

まんしゆも、ひとま所へかへり、きぬひきかつき、りうていこかれなきけるか、夜もやう〳〵ふけかたに、めのとのさらしなをめされて、「いかに、さらしな、うけたまはれ。母のからいとは、かまくら、いしのろうにましますと、うけたまはりて候。わか身、いかやうにも、かまくらへゆき、御行ゑたつねまほしくこそおもへ。さらしなとの、ひとへにたのむ、つれて、かまくらへ下りてくれよ」と申されける。

さらしな、うけたまはり、「男ともおもはす、女の身にて、にはかふちにましますをやこをは、何とか尋給ふへき、まんしゆさま」とそ申ける。

まんしゆはきこしめし、「これは、いはれぬ申事、みつから、かまくらへのほり、から糸をはゝなると、たつねまいらはこそ、人もふしんとおもふへし。かまくらとのか、それなくは、ちゝふ殿か、わた殿へ、五年も三年も、ほうこう申、かまくら中にならは、いかてか、母の御行ゑを聞いたさるへきそ、さらしなとの」との給へは、さらしな、うけたまはり、「おさなき人の心にさへ、おやの御をんをおほしめす。わらは、いやしきものなりと、おしうの御おんをわすれ申さん。野の末山のおくまても、みつから御とも申へし」。

まんしゆ、きこしめし、なのめならすによろこひ、「さらは、旅しやうそくせん」とて、まんしゆ、その日のしやうそくは、はたには、ねりのあはせをめし、おやをたつねしかと出なれは、めてたき事を聞そめの小袖、しけむらさきのからおり物、十二ひとゑを引かさね、柳色のはかまをきて、いちめ笠をそめされける。

めのとか其日のしやうそくには、そめつけのはたつけに、みのきぬの染小袖、七つひとゑを引かさね、あさきはかまをきるまゝに、しけもんのつゝみには、よろつの物をしのはせて、めのとかこれをいたゝきて、ふるさと出られける。

まんしゆひめもさらしなも、あとさきしらぬ旅なれは、たゝれける。まんしゆ、仰けるやうは、「いかに、さらしな、うけたまはれ。月日は、ひんかしのそらより出て、夕日、西へいり給候。月日を心にあてゝゆけ、さらしなとの」といふまゝに、月を日にかけ、くたられけり。

すてに、其夜も明けれは、てつかの里には、「まんしゆさま、うせたまふ」とて、きせんくんしゆをかへしけるに、にかう、

此よし聞しめし、「いかさま、これは、かまくらのかたへ出たるらん。いそき、それ、ととめよ」とて、かちやはたしにて、出られける。

しなのゝ国、あめのみやといふ所にて、やかておひつき給ひて、にかう、まんしゆにいたきつき、「いかに、聞か、まんしゆ。から糸は、はや、しゝたる物とおもひしに、なんちまて、みつからをすて、わにの口へたつね入、かまくらとのへ、きこしめしてあらは、にくきからいとか子なりとて、かならす、しさいにをこなはれ候はん。おもひとゝまれ」といひ給ふ。

まんしゆ、うけたまはり、「みつから、かまくらへまいりて、から糸をおやなりと、たつねてまいらはこそ、人もふしきにおもはんすれ。かまくらとのか、わた殿か、ちゝふとのへ、二年も三年も、ほうこう申ならは、いかて、母の行ゑをたつねいたさて候へきか、とおもひたちさふらふそや、にかうさま」とそ申ける。

にかう、きこしめし、「そのきならは、かまくらのちかくに、ふちさわのたうちやうと申て、ゆふきやう上人のたてたまふ御寺あり。しる人のあれは、たうしやにかくれいて、御身はかり、かまくらへこすへきなり」とそおほせける。

まんしゆ、うけたまはり、「人を忍ひて、たひこそ、おほせひつれてかなふまし。そのきならは、いかなるふち川へも、身をなけて、うき世の隙をあけん」といふ。

にかう、きこしめし、「人のおやの子をおもふならい、ゐまはの山のすゑを分るとかや。子かおやをおもふみちなきときゝつるに、扨も、なんちは、おやかう〳〵のものかな。そのきにて有ならは、ちからなし。尋ても見よ。さらしな殿を、ひとえにたのみ申也。よきにともしてくれよかし、さらしなとの」とそおほせける。

めのともうけたまはり、「御とも申候て、いつく野のすゑ、山のおくまても、火の中水のそこまても、ともに、いりしつみ申へし。御心やすくおほしめせ、にかう様」と申ける。

にかう、きこしめし、「そのきならは、かまくらへ下るとて、男ひとりはつけん」とて、五郎丸をつけられける。「さらは」といひて、たちわかれ、そなたこなたへゆくまての、はらふ涙の隙そなき。

まんしゆひめは、あめのみやをたち出て、とをる所はとこ〳〵そ。おやこのちきり、ふかしのさとこそめてたけれ。あさまのたけにたつけふり、身にあまれるおもひかや。いまいりやまを打過て、かうつけの国にかくれなき、とさはの宿をもうちすきて、いちのみやをふしおかみ、こたまてらにいてしかは、おやのなみたかちゝふやま、すへのまつ山打過て、かすみのせきをも分こえて、ぬるのこほり、やせの里、いくらのさとをか越つらん、くもらぬかけはほしのやの、とりみかはらをも打過て、かまくら山につきたまふ。

つるかをかへまいり、「なむ八幡たいほさつ、よろつの御神にて、親かう〳〵の御神と、うけたまはり候へは、わか母のから糸の、露のいのちの有うちに、めくりあはせてたひ給へ」と、かんたんくたきて、いのられけり。

其夜はこもり、すてに、その夜も明けれは、文こま〳〵とかゝれたり。「みつからは、何事なく、かまくらへまいりて候。と

にかくに、にかうさまの御いのちを、よく〳〵おしませ給ふへし。命まつたうもつかめは、ほうらいにあふとかや。ある人の歌に、

いのちあらはいくせの秋の月もみん
きえてはいかに露の玉のお

と、おほせをかれけるときこへ、たゝ、御命かせんにて候。御いのちのましましてこそ、から糸にも、又あはせ給ふへき」とかきて、「かまくらより、てつかの里へかへし。まんしゆ姫」とかきとゝめて、そのゝち、まんしゆひめは、御しよさまへまいり、御ほうこうをそ、のそまれける。

みたひ様には、きこしめし、「くにはいつくのものそ。おやはたれといふものそ」。まんしゆ、うけたまはり、「むさしの国、ろくしよへつたうのものにて候。おやをはなのり申まし。御奉公申ならは、たつぬるものか、おやにて候はん」と申されける。

みたい、此よし、きこしめし、おやをなのり申さねは、御きつくわひにおほしめす。「まつ〳〵、じゝうかつほねにて、御奉公申せ」との給ひけり。つほねのかたへあつけ給ふ。まんしゆは、じゝうのつほねにても、まんしゆは、きようのものなりとて、情をそかけ給ふ。

二十日はかりの其間、心にかけて聞けれは、からいとゝいふ名をさへ申さねは、ある夜のね覚に、まんじゆ姫の、めのとにおほせけるやうは、「いかに、さらしな。うけたまはれ。われも人も、ほとなく二十日すくるうち、からいと殿、名をさへ人の申さねは、浮世にもなき人か。いきて此世にある人をは、よきあしき、沙汰するならひあるに、今は、名をさへ申さねは、かならす、これははや、むなしくなり給ふとおほゆるそ。二十三日か其間、尋きて、あはてはてなん、かなしさよ」と、ふししつみ、りうていこかれ、めのと、おほきにはらをたて、「しなのを出しその時は、二年も三年も、かまくら中にましまさんと、おほせありしか、未二十日もすきさるに、御涙なかさせ給へは、涙の色にて人にしられ、かならす、しさいにあひたまはん。その時、みつから、うきめを見んよりも、あすは、しなのへのほり申さん。御身はかりになり給へ」とそ、はらをたて、まんしゆ、おほきにおとろき、めのとにいたきつき、「其儀ならは、今よりのちは、なけくまし。万事とまれ」となき給ふ。めのとも、しゝうも、夜もすから、なきあかす。

その夜もすてに明けれは、まんじゆ、御所様のうらに出、あたりをなかめ、たつところに、いつくともなく、さつしき一人まいり、「いかになふ、まんしゆ。此くぎぬきの内へ、いらせ給ふな。御はつと也」とそ申ける。

まんしゆ、きこしめし、ことのしさいをとひ給へは、みつし、うけたまはり、「御所かたの女房に、から糸殿と申を、いしのろうに、つきこめ給ふにより、是よりあなたへ、女はうも男も、嫌なく、御はつとあり」とそ申ける。

まんしゆ、きこしめし、から糸ときくからに、雪ならはきえ入はかり、うれしくて、「よくこそ、みつしはをしへ給ふ。われは夢にもしらぬなり」と、よろこひていにて、御所へまいり、めのとをちかつけ、「からいとさまの御行ゑを、只今きいてあり。悦給へ」といふまゝに、又、かきくれてなき給ふ。めのとも、よろこひ、涙をなかす。

比は三月二十日、かまくら山のはなとて、折ふし、御前に人もなく、まんしゆ、悦、母のゆくゑをたつね見んと、御所の内を忍ひ出、くきぬきを見てあれは、しやう八まんの御はうへんかや、おりふし、番衆もなかりけれ共、よその見る目あるやらんと、人のとかめぬさとのいぬあるや、とはかりうたかはれ、めのとをは、門のわきにたゝせ、わか身は、内へ尋入けり。雨吹をろす松風の、をとさはかしきあたりをは、人のあるやとうたかはれ、心をしつめ、あたりを見る。二十日夜なかの月雲はれて、たつね入て、月すこし見え給へは、松の一むらある中に、いしのろうこそみえにけり。

まんしゆ、あまりのうれしさに、いそきはしりより、ろうのとひらに手をかけて、内の体をきゝける。から糸、人をとを聞つけて、「そも〳〵、かとにをとするは、たれ成らん。へんけの物か、又、から糸かうつてにむく人か。御使にてましまさは、浮世のひまをあけかたし」と、かきくときてそなかれけん。

まんしゆ、うけたまはり、「から糸」といはれて、ろうのすきより手を入て、母の手をとり、「是は、母にてましますか。わか身は、まんしゆにてさふらふそ。なつかしさよ」といふ。「何事そ。まんしゆをは、しなのにこそ置つるに、ことしは、わつか十二歳になるとおほえたり。ゆめ（か）うつゝか、まほろしか。夢ならは、さめてののちは情なし」と、かきくときなかれける。

まんしゆ、うけたまはり、「おほせのことく、しなのゝ国にさふらふか、ろうしやさせ給ふよし、風のたよりに承り、命にかはり申さんと、是まてまいりて候そ」。

から糸、きこしめし、その時、まんしゆ、手をとりて、うれしなきになき給ふ。御涙をおさへ、「うはさまの御命は、いまた、めてたふましますか。なつかしや」とおほせける。

まんしゆ、うけたまはり、「何事もましまさす。御心やすくおほしめせ」と申けれは、から糸聞て、「なんちはかりまいりたるか」。まんしゆ、うけたまはり、「さらしなをつれてまいりける」。から糸ときこしめし、「いつくにしのはせて置けるそや」。まんしゆ、申けるやうは、「よそのみる目もいふせさに、御門のわきにしのはせて候」とて、やかて、つれてそまいられける。

から糸、御覧して、「いかに、さらしな、めつらしや。からいとかあり様を、ふひんとおもひ、まんしゆ、親子の契なれは、尋下るもことはりなり。めのとゝはいひなから、たにんにて有ものか、これまてくたるはふしん也。むかしより、世にあるしうの跡をはたつぬれとも、世にはてたるしうをたつぬる物は、しやうたひてあらし。かたしけなし」となかれける。しうも、めのとも、おやも、子も、たかひになかす涙の色、ふる雨のことくなり。

其後、から糸は、涙をとめて、おほせけるは、「わか身も、人も、いきてうき世にたいめんして、うき世のまうしうはれてあり。さらしなを、ひとへにたのむ。つれて、しなのへかへれとよ。なこりおしや」との給へは、まんしゆ、承り、「しなのゝ国を、出しより此かた、御命にかはらんとおもひきりて、まいり候へ」と、「はつたと、しなのへかへるまし」となきけれは、から糸、きこしめし、「そのきならは、たひ〳〵これへまいる

なよ。人にしられて候はゝ、にくきからいとか子なりとて、我よりさきに、しさいにおこなはれ奉らん。よく〳〵しのへ」となかれたる。

まんしゆ、うけたまはり、「国を名のり申さす、親をも名のり申さねは、存人も候まし」と、涙をなかして語まに、夜はすてに明けれは、御所の内へそ帰りける。ひとつ小袖を町へいたし、かなはぬ物をもとめつゝ、めのとの忍ふ時もあり、みつからしのふおりもあり、九月かその間、母をやしなふ哀さよ。

つきのとしの正月二日の日、かまくら殿の、つねに御きねんめさるゝ、しゝいのまの御さし敷に、小松か六本、たゝみのへりにねをさして、おひたるこそふしきなれ。

よりとも、おほきにさはかせ給ひ、「か様成草木は、つちにこそ根をさすに、たゝみの上にねをさして、おひたる事こそふしきなれ。かまくら中のわつらひか、また、よりともか身の上か。はかせを」との給へは、その比、かまくらにかくれなき、あへのなかもちと申はかせ有しを、めされつゝ、「いかにや、なかもち、うけたまはれ。つねにきねんする、しゝゐのまのさしきに、今夜のうちに、小松か六本おひたり。かまくら中の煩か、よりともか身の上か、又、天下のみたれか、うらなゑ」とのおほせ也。

はかせは承り、「そも〳〵、おきはきのはなの、花のいのちをのふる事、あまたありとは申せとも、せいわうほのそのもゝ、三千年にいちと、はな咲、みなるとは申せ共、見たる人も候はす。しんしやさいかいの、八千よのとしをふる事も、また、八千代くさは、八千世のとしをふる事もきくに、千のしゆみやうも、あひおひのまつにしくはなし。そも〳〵、君か八千代をかさねて六千歳、かまくらやまに、としをよせさせ給ふへき。かほとのめてたき御事に、あひをいの松か枝に、鶴かをかの玉垣の内へ、ほうらいにうつし置、十二人のたをやめをそろへ、今やうをうたはせ給は、ちんとくをうけ、君はめてたふましますへき」。

よりとも、なのめにおほしめし、六ほんの小松を、つるかをかの玉垣の内へ、うつし植させ、十二人のたをやめを、そろへまいらるゝ。

一番には、てこしのちやうかひめなる、せんしゆのまひ、二はんに、とうたうみの国、ゆやかむすめ、しゝう、三番に、きせ川のかめつる、四はんに、さかみの国、山田の少しやうかむすめ、とらこせん、五はんに、むさしの国、いるまのほたると申しらひやうし、是をはしめて十一人、かまくら中はひろけれとも、今一人に事をかき、くさきのもとまて尋らるゝ。

其後、まんしゆ姫のめのと、まんしゆをちかつけ、「御身はみめもよし。いまやうも、しやうすにてましませは、此たひ、出て、いまやううたはせ給ひ候へ」と、「まんしゆさま」と申ける。

まんしゆ、きこしめし、「此たひの今やうは、よのつね〳〵のいまやうにはかはり、むつかしきに、みつから、なとにはからふへき。おもひよらす」とおほせけり。

さらしな、おほきにはらをたて、「かやうなる時、今やううたひ給ひてこそ、御悦もましまさん」とて、つほねへまいり、「まんしゆこそ、いまやうのしやうすにて候へ」と申上けれは、

御つほねより、御みたひさまへ、申あけらるゝ。
よりも、きこしめし、おほきによろこひ給ひて、まんしゆ、ひとめ見んとて、御前へめされ、御覧し、おほきに悦たまふ。みたいさまより、十二ひとゑの御しやうそくを下されける。もとより、姿はすくれたり。かたをならふる女なし。
ころは、正月十五日、御まへにやまをたて、大みやうのゆんてには、よりともの御さしき、八百八つと聞えけ□□□□めてには、大御しよ様の御さしきをはしめとして、八ケ国の大みやうしゆのうへかた、じやうらうしゆの御さしき、数しらす。かまくら中、きせん上下まいり、けんふつ申ける程に、つるか岡に、こまのたつへきかたもなし。
十二人のや乙女、七拾五人のみや人、かくらをそうし奉る。いまやうをはしめ奉り、まつ一はんに、いまやう、てこしのちやうかむすめ、せんしゆの舞、きせんくんしゆのはに、かいたうくたりをつけたり。
「大さか山のよるの月、くもらぬ影をやなかむらん、せたのからはしのちのさと、かすみにくもるかゝみ山、ふわのせき屋の板ひさし、かりねのゆめ、さめかひのしゆく、ものゝふのいせいは、おはりの国や、みかわなる、八はしのくもてに、物やおもふらん、知もしらぬもたうたうみ、はまなのはしの入しほに、こかれてのほるあまを舟、こかれてものやおもふらん、まゆみつきゆみひきまのしゆく、さよの中山せとをすき、うつの山へのつたのみち、てこしをすきて行ほとに、月をきよみかせきのとを、おしあけかたの空見れは、ふしのけふりやなひくらん、ゆめにもみはや都人、めてたやみよはいつのくに、浦しまか玉手箱、あけてくやしきはこね山、めいしよきうせき打すきて、かまくらやまをきてみれは、鶴かをかとや申らん、せんねんのめいてう、松は千年のめいほく、末めてたし」とて、うたふたり。
二はんに、きせ川のかめつる、しほりはきをうたふたり。「伊勢のはまをき、なにはやあし、かまくら山、むさし野のくさのおほしと申とも、しほりはきにしく物はなし」と、うたふたり。
三はんに、ゆやかむすめ、しゝう、たいへいらくをふむ。
四はんに、いるまのほたる、すすりわりをうたふたり。
五はんには、まんしゆなり。みたいさまより、御しやうそくはたまはりたり。としは十二の春なれは、十二ひとゑをしやうそくして、花の袖をかへし、かく屋の内より出ける。物によく〳〵たとふれは、くわほくをつたふ鶯の、谷の戸出たるふせひも、これにはいかてまさるへき。はたと上てうたふたり。
「あらめてたのかまくら山、かまくらは、八かかうとうけたまはる。はるはまつさく梅かやつ、あふきかやつにすむ人の、心はすゝしかるらん。秋は露おくさゝめかやつ、いつもふるかやゆきの下、まんねんかはらぬかめかやつ、つるのからこゑうちわたし、ゆいのみきはにたつ波は、いひしまへのしまつゝいたり。むりやうのほうしゆを、いた（た）きまいらせたり。君か世は、ちよにやちよをさゝれいしの、岩をとなりてこけのむすまて。たかさこや、あひおいの松、まんさいらくには、いのちをのふ。とうはうさくの九せんさい、うつゝらわうの八まん歳、しやうみやうこしの一まんさい、（せい）わうほうのその

もゝ、三千年にいちと、はなさきみなりとは申せ共、あひおひの松にしく事なし。そも〳〵君は、ちよをかさねて六千歳、さかへさせ給ふへき。かほとめてたき御事に、あひおいのまつかい、ふしやむりやうのよろこひ、きみにさゝけ申さん」と、小松の枝をゆりかつき、みなしろの大まくへ、二三と四五と、舞かゝりたりけれは、よりとも、御らんして、ほういにたてゑほし、しろきさやまきをさしなから、みなしろの大まくをなけあけて、「かゝるめてたき御事に、あひおいのまつかいをたまはり候はん」といて給ふ。

もとよりも、よりともは、いまやうのしやうすにてましませは、たつなみ、ゐるなみに、よするなみ、ひくしほのへに、あしを、たんこふしきとふんて、あふきなかしをうたひすまして、まんしゆかたもとに、よりとものひたゝれの袖、まひかさね、二三と四五とまわせ給へは、風ふかぬに、大宮玉の戸も、きり〳〵はつとひらき、八幡もなふちうあるとそ聞えけるほとに、八百八つのみすすたれも、きちやうも、くんしゆをかへしける。

其後、よりともの内へいり給ふ。まんしゆ姫は、がく屋のうちへいりたり。よりとも、おほせけるやうは、「たれやの人か、はからふへき。めてたふも、まふておさめたり」とて、今やうはましまし。はるの日の暮るまて、御さかもりと聞えける。春の日のかたふけは、みなかまくらへ帰せ給ひ、つきの日、まんしゆをめして、「さても、なんちは、いまやうのしやうすかな。めてたふもうたふたり。国はいつくのものなるそ。親をはたれと申らん。おやを名のれ。ひきて物たまはるへき」とそおほせける。

まんしゆ、うけたまはり、なのらしものとおもへ共、此たひ名のり申さすは、かなはしとやおもひけん、おもひきりてそ名のりける。「みつからかおやを、御尋てはし候はゝ、御まへ様の御内に、いしのろうにつきこめられて候、からいとかむすめにて候也。されは、四つ子にて捨られさふらふか、こそのはるの比、母かろうしやのよしを、しなのゝ国にてうけたまはり、今はあるにもあらね共、あられすして、母のいのちにかはらんと、是まてまいり候そや。此たひの、今やうの御引て物には、母か命に、みつからをとりかへてたひ給へ」とそ申ける。

よりとも、大きにおとろき、しはらく物をものたまはす。やゝあつて、「から糸、なんし、母にてありけるそや。からいとをたすくる事、からすのかしらかしろくなり、駒のかしらにつのおゆるとも、たすけましきとおもへ共、此たひのよろこひに、なに物かをしからん。からいと、露の命、なからへて有ならは、いそきめし出せ。まんしゆにとらせよ」とそおほせける。

つちや、「承り候」とて、石のろうを引やふり、二とせにあまるろうしやなる、から糸をめしいたし、御所様の大にわへめしくして、まんしゆにこそわたされける。

まんしゆ、なのめに悦て、母にひし〳〵といたきつき、うれしなきにそなかれける。母もろ共に涙をなかし、よりともをはしめたてまつり、大御所、みたい、ゐくらもましますさふらひたちも、「人けんのたからには、子にますたからなし。扨も、まんしゆ、男ともおもはす、十三歳のものか、是まてまいり、わにかふちなるおやをたすけたる、ふしきなり」と、みな、か

んるいをそなかさるゝ。

そのゝち、よりともは、まんしゆに、引て物ゑさせんとて、しなのゝてつかの里、一まんてやうの所をは、まんしゆにとてこそ下されける。みたいさまより、よき銀すくりて、七百両、ふしわた、せんは、まんしゆか宿へそ、をくられける。御所様よりの御引て物には、よきかね、三百りやう、みのゝしやうほん、せんそく、下されける。是をはしめて、かまくらの大みやう、我も〳〵と、引て物を、まんしゆに給りける。

よりとも、おほせけるやうは、「まんしゆをは、かまくらにとゝめたくは候へ共、母の心のおそろしきものなれは、急、しなのへのほれ」とて、御いとま給り、まんしゆ、なのめによろこひ、から糸をひきつれて、しなのへこそ帰りける。

下には、二十三日にくたりしか、帰りには、五日と申に、てつかの里へおちついて、うはのにかうを見申せは、万事、ゆかしなきにふして、今をかきりと見え給ふ所へ、まんしゆ、参りて申やう、「にかうさま、われ〳〵は、まんしゆにて候。是は、からいとにておはします」と申せは、にかうは、親子のものを御らんして、うれしなきにそなき給ふ。いちそくいけのものまても、よろこひの涙なかされける。

まんしゆ、おやかう〳〵なるゆへにより、つるかをかの、八幡大ほさつの御はうへんにて、いまやうをうたひ、御しよりやう給りて、二とせあまり、ろうしやしたる母をたすけ、数のたからたまはりて、しそんともにはんしやうするも、まんしゆ姫の、おやかう〳〵のゆへなりとこそ、うけたまはれ。かゝるめてたき物語かなと、かんせぬ人はなかりけり。